

学力向上に効果のある取組事例

大分大学教育学部附属小学校

⑰校内研修などによる授業改善

取組の具体

1 全ての授業の土台となる学級経営の徹底

○学級に受容的な雰囲気や聴き合う風土が構築され、児童が安心して授業に臨めるよう学級経営（フリートーク、褒め言葉のシャワー、価値語、成長ノート）を校内研修に位置づけ学校全体で取り組んでいる。

2 学級経営の土台の上に、組織的な授業改善の取組を構築する

○自己調整学習を中心に授業研究を深めると共に、支える学級経営の在り方についても関連付けて研究を行っている。年間 20 本以上の授業研究の後に事後研を行ったり年間を通じて外国語や総合的な学習の時間、ICT のスキルアップ研修を行ったりして教員全体の指導力向上につなげている。

○改訂された新大分スタンダードの要素を含めた「授業観察シート」を用いながら、年間一人 2 回以上、指導教諭等による授業観察を行い、その都度指導（事後研）を行っている。また、授業観察の結果を数値化し、目標管理シートにも反映している。

○「チーム研究」を校内研究に位置付け、3 つのチームを組織し、ファシリテーターを中心に、自己調整学習について互見授業を行い、成果や課題について協議し、授業改善につなげている。

3 資質・能力の育成をめざし、文部科学省や大分県教育委員会の指導をふまえた授業改善を進める

○学習指導要領に基づき、付けたい力（資質・能力）を明確にした授業を日常的に行っている。

○次期学習指導要領改訂の基本方針・ポイントや県の改善の重点をふまえ、本校での各教科・領域の授業改善を図る取組を考え、実践をしている。また、年間 7 回（通算 22 名）県の指導主事を招聘し、授業等について指導・助言をもらっている。

○全国学力学習状況調査の結果を、全国の国立小学校と比較し、目標値等を定めている。指導教諭の分析を基に、継続すること・改善が必要なことを全教職員で共通理解し、日々の授業改善につなげている。

○校内研究テーマを「グローバルリーダーに求められるエージェンシーの育成～自己調整学習を通して～（2 年次）」と設定し、自ら学びに向かうことができる児童の育成をめざして、個別最適な学びと協働的な学びの一体化等を含めた授業改善への効果的な実践研究を進めている。

4 全校で取り組んでいる「外国語」「生活・総合的な学習の時間」の知見を、他教科にいかす

○外国語科や外国語活動、総合的な学習の時間など、目的意識や相手意識を明確にした単元構想を確実にやっている。総合的な学習の時間における探究サイクルを、各教科・領域の単元構想に活用している。

5 どの教科においても日常的に情報を活用した言語活動に取り組む

○これまでの「情報活用能力の育成」の研究を生かし、日常的に情報活用を意識した授業を行っている。

○自分の考えだけでなく、友達の考えを説明する（対話的学び）場を多く設けている。

○国語で出題されたような情報を収集し動画を作成する学習や調べたことから分かったことをまとめて伝える学習、学級での話し合い活動を、各教科だけでなく、特別活動・総合的な学習の時間においても日常的に取り組んでいる。

大分大学教育学部附属小学校 授業観察シート

令和8年度

日時		学年	年 組	授業者	教科等	国語	指導教諭	梅木 崇裕
研究テーマ			グローバルリーダーに求められるエージェンシーの育成 ～自己調整学習を通して～(2年次)					
	新大分スタンダードの 視点	重点選択 A1つ B2つ	評価の観点例			自己 評価 0.5刻み	指導 教諭 0.5刻み	主に重点選択に対する指導助言(指導教諭等)
A 授業 構想	単元構想 評価規準	○	- 単元や題材を通して育成する資質・能力が明確になっているか。 - 評価規準は学習指導要領を踏まえて設定できているか。 - 具体的な子どもの姿で評価規準を設定しているか。 - 本時のねらいは適切に設定できているか。			3	3.5	○修学旅行プロジェクトと関連づけた単元構想は、修学旅行での見学地を友達にプレゼンするという目的も明確で、児童にとって必然性やリアル感も十分に動機づけを高めていた。単元のゴールも明確なため、児童の活動も非常に意欲的であった。
	問題解決的な展開		・学習の課題やめあては単元全体を見通しているか。 ・適度な困難さや必然性が有り、達成感や成就感を得られる展開であるか。 ・単元や題材の内容や時間のまとまりを見通した単元の指導計画を作成しているか。 ・個別最適な学び、協働的な学びを授業作りの視点に入れているか。				3.5	○ロングレンジで学習に取り組むことで、児童は自分で学習を計画、遂行し、振り返るという自己調整しながら学びを進めることができていた。 ○見通しのプロセスで、個人目標を設定することで、学習形態を個人で資料作成する、友達と資料作成する、友達とプレゼンを見合うなど自分の学習進度や目標に合わせて、選択・判断・決定し、取り組むことができた。カードの色を変えることで可視化され、児童も教師も一目で今日の学習で各自がめざすことが分かるようになっていた。
	教科横断的視点 教材研究		・日常生活や既習事項との関連など子どもの学ぶ意欲を引き出すものであるか。 ・他教科・領域との関連を意識した単元構想をしているか。 ・他教科・領域で付けた力が発揮される展開になっているか。				3.5	○導入や中間指導での「行ってみたいと思ってもらいたんだよね。」の教師の声かけは、相手意識をもつことができるようにし、めざす単元ゴールを明らかにした自分のプレゼンを見直す(メタ認知)きっかけとなるものであった。
B 授業 展開	めあて 課題		・めあては子どもと共有されており、本時で何をするかが分かるか。 ・必然性や解決に向けての見通し、視点、手立て、条件等が具体的であるか。 ・課題や発問は焦点化されており、本時のねらいに迫るものであるか。				3.5	○掲示してある教師モデルの資料や構成シート、学びログがあることで、児童は困った時の解決の場として積極的に活用することができ、学びのコントロールにつながっていた。
	まとめ 振り返り	○	・課題に対応した適切なまとめとなっているか。 ・習得した学びや学び方を振り返ったり、次時への学びを意識したりできる内容になっているか。 ・振り返りの視点を与えているか。			3	3.5	○プレゼンのリハーサルを何度も繰り返し行うことで、自分自身の気づきや友達からのアドバイスをもとに自分の資料の改善をしていた。モニタリングとコントロールを繰り返しながら、学習に取り組む姿が見られた。
	時間配分設定 ファシリテーション		・学習過程における時間配分は適当か。 ・子どもが考える場面と教師が教える場面の効果的な組み立てができているか。				3.5	○児童の学習の様子を積極的に見取り、声をかけることで、児童の資料作成がよりよいものになっていた。最初の段階では個人でやっている人に、次に友達とやっている人にと声をかける順番も困りの解決につながるよう配慮されていた。また、終末に見取った姿を価値付けの際も、画像を提示し、児童から気づきを得ることで、学級全体でモニタリングを図る手立てとして有効であった。
	板書の構造化 教材・教具		・論理的に思考できるように比較や関係付け等の工夫をしているか。 ・子どもが思考の過程を振り返ることができる板書の工夫をしているか。 ・ICT(1人1台端末を含む)を効果的に活用しようとしていたか。 ・ホワイトボード、掲示物等の教材・教具を効果的に活用しているか。				3.5	○資料作成中も自由にリハーサルをしている児童の様子を見に行くことで、資料作成に必要なことに気づき、援助要請をしている姿が印象的であった。
	きめ細かな指導		・子ども自身や教師が習熟の程度を掴むための工夫をしているか。 ・特別な支援が必要な子どもへの支援を工夫しているか。 ・C評価の子どもを中心に子どもの思考や困りなどを適切に予測、具体的な支援をしているか。				3.5	○振り返りのプロセスでは、自分の学習状況や学習方法についてしっかり自己の学びを観察し、自己評価や原因帰属、次の時間への適用など自己調整をする姿が見られた。
	自己存在 自己決定 自己表現	○	・子どもの思考する時間を確保しているか。 ・子ども自身で選択し、決定する場を設定しているか。 ・子どもの困りや気づきなどの思考の流れを生かしたり関連付けたりしているか。			3	3.5	また、友達の使用する付箋のよさに気づき、自分の改善に役立てようとする姿が見られた。
	共感的人間関係		・お互いの意見を聞こうとする場や信頼関係を築いているか。 ・自分の意見を言いたくなる工夫や仕掛けをしているか。 ・ペア学習やグループ学習の目的や内容は適切か。				3.5	・「何故、自分はその場所を紹介したいのか」常に理由にこだわって振り返ることで、プレゼンの質が更に向上すると思われた。例えば「はじめに」の資料で自分の思いを語ることで、聴き手の興味を高めたり、友達からのアドバイスが技能面だけでなく、より内容にも焦点を当てたものになったりするのではないかと感じた。
評価	自己評価区分	評価平均	学びや振り返り・更なる授業改善に向けて(授業者)					
4	十分満足できる	3.50	自己調整学習についての研究が二年目となり、自分自身の理解も深まっている事から単元の導入や意欲づけなどスムーズに行うことができた。児童もロングレンジ学習に慣れており、教師側の意図をよく汲み取ってくれて、様々なシーンでモニタリング・コントロールする姿を見取ることができた。また、教室のいろんなところで援助要請する事ができたり、協力して学習活動を進めることができていたりしていたことから、日々の学年や学級での取組で、児童が心理的安全性を感じることができていることがわかり、授業を支える根拠として今後も大切にしていこうと思った。今後は単元の導入をさらに大切にし、児童の思いや願いを高めると同時に、そこにこだわりを持たせることを意識していきたい。各単位時間の始めには、「なぜ」「どうして」など繰り返し問い返しをして、児童自身が自分の思いや願いにこだわりを持ち、学習活動を進めることができるようにして、単元の終末にはますますの達成感を感じることができるような授業展開をめざしていく。					
3	満足できる							
2	標準である	自己評価						
1	やや不十分である	3.00						